

《村上公子先生退職記念 送る言葉》

村上公子先生のご退職に寄せて

*Farewell Message for Professor Murakami Kimiko*

村上先生とはじめて言葉を交わしたのは、駅のベンチであった。西洋史学会か、あるいは何かのシンポジウムの帰りで、私は博士課程の院生だったと思う。先生がお一人でベンチに座っているのをお見かけして、「村上先生、私、ドイツ史を専攻していて、先生のご著書から学び、何度も先生のご講演を拝聴しています！」と、興奮気味にお声がけをした。先生は、少し首を傾けて、「私、そんなに何度も講演をしたかしら。」と静かに微笑まれた。その謙遜的な物言いが印象的だった。

私が史学科の学部生だったころ、村上先生は、山下公子というお名前でも最初の単著である『ミュンヘンの白いバラ——ヒトラーに抗した若者たち』（筑摩書房 1988）を発表された。当時の日本のドイツ史学界には、女性の研究者はごくわずかで、私は史学科の図書室で本棚の前に立つたびに、憧れの気持ちを抱きつつ、背表紙に印字された先生のお名前を見つめたものだ。

大学院生になって、ドイツに留学し、ミュンヘンを訪れた時も、そのご著書を目にした。ナチス抵抗運動に身を投じた学生らの死を悼み、ミュンヘン大学構内に設置された「白バラ」研究を紹介するガラスケースの中に、先生のご著書が展示されていた。先生はその後、『ヒトラー暗殺計画と抵抗運動』（講談社選書メチエ 1997）を上梓された。日本におけるナチスの抵抗運動研究の第一人者として、ドイツでもその功績が認められている先生には、尊敬の念しかなかった。

それからしばらくして、先生と私は早稲田大学の同僚となった。所属学部も

キャンパスも違うが、2002年には偶然にも教員組合の活動でご一緒し、夏の合宿では寝起きを共にした。日本ドイツ学会でも、理事・幹事に選出され、とくに学会奨励賞の選考委員会では、先生の深い知性と学識、見識に幾度となく感服した。先生はドイツ史研究者であるだけでなく、言語と文学をも広くカバーするゲルマニストであり、歴史、思想、精神分析など多様なジャンルの優れた翻訳者でもある。アリス・ミラー『魂の殺人——親は子どもに何をしたか』（新曜社 1983、新装版 2013）、フランツ・ルツィウス『灰色のバスがやってきた——ナチ・ドイツの隠された障害者「安楽死」措置』（草思社 1991）など、社会的にも話題になった多くの本の翻訳を手がけている。

このようにご活躍をされている先生が、ジェンダー研究所にお入りになりたいといわれたのは、私にとって大きな喜びであった。

先生はグローバルエデュケーションセンター（前オープン教育センター）で、2003年度から「女の愛と生涯——独日比較」のゼミを担当され、退職される2021年度まで、長きにわたってさまざまな学部の学生を指導された。ジェンダー研究所が刊行した『ジェンダー研究/教育の深化のために——早稲田からの発信』（彩流社 2016）にも寄稿され、白バラの主要メンバーであるハンス・シヨルについて、その「リーダーにふさわしい、信頼できる好青年」というイメージが、戦後、遺族や書簡集の編者によって意図的に形成されたものであることを検証した（「選ばれた書簡——『書簡集（白バラの声）』に見るハンス・シヨルのイメージ戦略」）。また、女性教員同士の交流の場として一定の役割を果たして幕を閉じた早稲田大学女性連絡協議会について、その活動を記録にとどめておく必要があると判断され、本誌（第11巻 2021）に論考をまとめ、発表なされた。この協議会が成立した1997年には、早稲田大学全体でも女性教員が数えるほどしかいなかった。村上先生が赴任される以前のことで、関連資料が不十分ながらも、その歴史を書かれたことは、早稲田大学の歴史にとっても大変意味のあることであると思う。

先生は、研究所の例会に参加されるときも、静かに柔らかい笑みを浮かべな

がら、問題の核心を突くコメントをなされていた。大学を退職されても、ジェンダー研究所の活動に変わらぬ愛情を注ぎ、後進の研究・教育活動を支えてくださることを切に願っている。